

手賀沼が海だったころ

創立25周年を迎えた当会の歩み



1. 当会創立をめぐる状況

当会は、今年9月で創立25周年になります。会が設立される直前の1999年6月13日には歴史シンポジウム「手賀沼が海だった頃—松ヶ崎城と中世の柏北域」が開催され、市民・研究者に松ヶ崎城に関する関心が高まる中、同年9月26日に、有志10人で当会が発足しております。

当会副会長など役員を長く務めた小柳満雄氏（故人）によれば、スタジオWUUをつくる時、ミュージシャンのパーティのようなものがあって、有志で地域の話をした流れで、後日松ヶ崎城跡の保存について、何回か会議をもって、とにかく関係者に会いに行こうということになり、市長にも掛け合ったりして、進んできたとのことでした。有志による城跡保存への関心の高まりが、当会創立へつながった訳です。

2. 松ヶ崎城跡の保存と公益市民団体としての活動

当会が1999年9月26日に発足、活動するのと並行して、松ヶ崎城跡に関する調査・研究が進みました。当会は2002年6月に柏市長に保存の要請書を提出、さらに「松ヶ崎城址及び周辺森林の保存のお願い」の署名を集め、翌2003年2月に柏市議会に請願、採択されました。

また、2002・2003年の2回の発掘確認調査の結果を受け、松ヶ崎城跡が2004年7月1日付で、柏市文化財に指定されました。その後も保存問題はあったものの収まって、河津桜が咲き誇る城跡が保存されているのです。



<1999年6月13日行われた歴史シンポジウム>

当会は、創立当初から講演会、見学会などを行って

きましたが、柏市の市民公益活動団体として地道な活動も行ってきました。

創立当初の『手賀沼が海だった頃』という単行本の発刊に加え、会報は当号で50号となりました。またスタートが創立15周年記念からで遅ましたが、会誌も作成しています。

当初「地域史を話す会」として数名の会員有志で始めた活動は、「歴楽講座」となって、年に8回～10回開催と定着しました。

3. 地域と自然の中で

松ヶ崎城跡は文化財であると同時に、里山でもあります。当会は地元の人々からみれば、城跡に植樹をした会にしか見えないかもしませんが、カシニワなどを含め各種イベントも行ってきています。



<松ヶ崎城跡の見学会>

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報

2024年3月31日

第50号

当会の活動から

当会の活動は25年近い実績があり、限られた紙面で紹介しきれませんが、その一端について以下に掲載します（記載されている方の所属、役職などは当時のもの）。

シンポジウム 「松ヶ崎城と街道（みち）－中世柏地域の陸上交通－」

2004.11.28 柏中央公民館にて 参加人数：141人

講師：中山文人氏（松戸市戸定歴史館学芸員）、間宮正光氏（山武考古学研究所主席研究員）、

井上文男氏（柏市教育委員会文化課文化財担当）、遠山成一氏（千葉城郭研究会事務局長）

司会：鈴木英夫氏（國學院大學講師、当会顧問）

会創立20周年記念講演と朗読劇の集い「中世城郭を探る～東葛から常総へ」

2019.9.22 アミュゼ柏 プラザにて 参加人数：84人

講師：間宮正光氏（日本考古学协会会员）、佐脇敬一郎氏（柏市史編さん委員会参与）



＜講演の様子＞



＜ふるさと舞台化プロジェクトによる「箕輪城の女城主・日女若ものがたり」の朗読劇＞

松ヶ崎城跡樹木里親記名板の除幕式

2010.7.4 松ヶ崎城跡にて 参加人数：80人



＜力を合わせて除幕＞



＜記名板の前で＞



＜2010.3.1 植樹の様子＞

当会が呼びかけて、樹木里親の会として2010年に植樹した河津桜（50本）は、今では大きく成長し、台地上にロータリークラブが植樹したものとあわせて、毎年春には可憐な花を咲かせます。

当会はともかく25年存続し、今後も継続していくこうとしております。今後とも皆様のご指導、ご協力をよろしくお願ひいたします。



柏市域の地名と歴史（後編）

森 伸之

6. 開墾にまつわる新地名

千葉県の明治初期の開墾地名は、前記の通り、最初の初富（鎌ヶ谷市）から十三番目の十余三（とよみ：成田市）まで続く。

下総台地の集落をのぞいた、大昔は原野であった部分をほぼ占める広大な牧は、中世以来軍馬の供給地として形成された。そして、江戸時代には小金牧や佐倉牧という幕府直轄の牧がつくられた。明治維新で明治新政府ができると、家禄を失った旧武士階級や都市困窮民の救済のため、下総の牧の大規模な開墾が新政府によって企てられ、入植が行われたのであるが、これは開墾で農地を拡大するというより、士族授産や窮民対策の意味あいが強かった。

そして、開墾地には、開墾順序に合わせて地名がつけられた。

その最初が現・鎌ヶ谷市

の初富であるが、初めて富を得る場所という意味らしい。以降、二和（船橋市）、三咲（船橋市）、豊四季（柏市）、五香（松戸市）、六実（松戸市）、七栄（ななえ：富里市）、八街（八街市）、九美上（くみあげ：香取市）、十倉（富里市）、十余一（白井市）、十余二（柏市）、十余三（成田市、多古町）と続く。

千葉県四番目の開墾地である豊四季は、明治2年（1869）11月より入植が始まった。すなわち、明治2年（1869）10月26日に鎌ヶ谷に入った第一陣の約半月後の11月17日より、小金牧の上野牧があった豊四季へ入植したのである。

「四季 豊に稔れ」という地名に込められた願いとはうらはらに、初期に於いては苦闘の連續であった。

農業だけでは生活が苦し木釘作りの副業も行われ

た。入植者は旧武士階級のほか、東京にいた非農業の窮民であったが、豊四季は東京から来た旧武士階級の残存比率が他の開墾地よりも高い。

開墾に入った人々は、開墾地に神社（別雷・稻荷神社、永寿稻荷神社、一本松稻荷神社等）や寺を建立した。江戸には稻荷が多かったせいか、あるいは稻荷は稻を象徴する穀靈神であるためか、東京から来た開拓民は豊四季各地に稻荷神社を建立していったのである。新富近隣センターに隣接した稻荷神社には、豊四季開拓百年記念碑や岩倉報恩碑がある。

柏市域にあるもう一つの開墾地名である十余二についてはどうであろうか。十余二の開墾地は、柏飛行場、米軍接收、柏の葉開発と時代の変遷をたどった。

十余二是もともとは幕府の牧のひとつ、高田台牧があつたところである。明

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報

2024年3月31日

第50号

治新政府の開墾で、開拓会社が作られたが、その開拓会社を実質的に支配する政商たちが大地主で、開拓民は小作農という関係が続いた。開拓民は多くが脱落、わずかに残った初期開拓民と途中で開拓に加わった近隣農民の手で開墾が完成された。

このように開拓会社は政商を中心としたが、そのなかに三井が入っていた。

大隈重信も大地主であったが、明治期の古い地図には大隈の屋敷が記載されている。

時代は下って日中戦争当時、昭和13年（1938）には当地に柏飛行場が開設され、インドネシア、フィリピンなどへの移動により部隊は入れ替わったが、終戦まで陸軍の飛行戦隊が駐屯した。戦後は柏飛行場の米軍接收を経て、柏の葉

の大規模開発にいたる。この十余二の地は、政商三井との関わりが深い。当地の管理は、三井組代理人であった市岡晋一郎という人物がおこなった。陸軍の飛行場になってからも三井が関係していたという説があり、それが戦後ゴルフ場になってからは、三井のゴルフ場で三井資本は当地にあった。

一方、十余二、高田原の開拓住民の運動の先頭にたった石塚与兵衛は、農民たちを糾合し裁判闘争に明け暮れ、何度も財産を強制処分されたにも関わらず、周囲の人たちに支えられ、80年もの歳月が過ぎ、遂に入植者の勝利となった。

彼らの勝利に関する象徴は、十余二の厳島神社にある「高田原開拓碑」である。しかし、その「高田原開拓碑」の碑文は、類例

のないような異様なものである。それは、昭和29年（1954）8月に建てられたが、この碑文は以下の通りである。

「当地は元小金原高田台牧也
明治二年より入植開拓せり
初期入植者は自作農たるべき筈の処

大隈及鍋島等の所有となりて八十余年昭和廿二年来の農地改革により初志貫徹すべて入植者の有に帰す」

実際に明治13年の陸軍参謀本部迅速測図には、十余二の大隈重信邸を記載している。「高田原開拓碑」の碑文は、明治政府の重鎮大隈重信や鍋島侯爵家の人らを呼び捨てにする、怒りのこもった碑文なのである。また、それは長い苦闘を象徴したものともいえる。



＜陸軍参謀本部迅速測図記載の大隈邸＞

大隈重信邸は現在の柏特別支援学校付近にあった

7. 開墾地名以外の柏の新地名

明治以降の柏市域の新地名は、開墾に関わるものだけではない。もちろん「あけぼの」「北柏」「柏の葉」のような新地名も該当するが、明治期の大合併によって成立した村の名である「土」、「千代田」、「田中」と「富勢」という地名について、以下述べることしたい。

柏市立土小学校は、県道51号市川柏線の沿道にあるが、その近くに土村道路元標がある。その学校名などに今もある「土」という地名は、実は合成地名である。



〈土村道路元標〉

明治22年(1889)の大合併で誕生した土村は、昭和29年(1954)まで続いた。増尾村、藤心村、逆井村、名戸ヶ谷村、今谷新

田(現・今谷上町)、根木内村、小金上町新田(現・今谷上町)、酒井根村、中新宿村、塚崎新田の10ヶ村が合併、村名を継承した10大字に、根木内村から生まれた根木内新田を加えた11大字を編成、十一を一字に合成した「土」を村名とした。現在の柏市域南部のほぼ全域が一つの村となった状況である。明治24年(1891)の土村全体の戸数487、人口は2,907人、昭和29年(1954)に土村が廃止された時点での人口は5,317人なので63年で1.8倍に増加したことになる。明治5年(1872)時点の人口は土村の一部となつた増尾村は749人、藤心村は305人、逆井村は418人、名戸ヶ谷村は404人などとなっている。酒井根村は明治7年(1874)で239人の人口であった。このように、土村は増尾村であった部分を中心としつつも、比較的中規模の村同士の合併であった。

明治22年(1889)の大合併では、後の柏町のもとになった千代田村が、柏村、戸張村、松ヶ崎村、高

田村、篠籠田村、戸張村新田、柏堀之内村新田の一部、柏中村下の8ヶ村と呼塚新田字落合が合併して生まれた。この「千代田」という村の名は、村の永遠の繁栄を願ったものという。なお、明治22年(1889)の大合併では豊四季村は独立した村として存続し、千代田村には入らなかった。「新開墾地」の豊四季村と「故村」の千代田村は「自然生活の状態も相異なる」(「新町村組織要領」として合併せず、連合村を形成することになる。ちなみに明治24年(1891)の千代田村は戸数405、人口2,787人である。千代田村は大正15年(1926)に町制施行され、柏町となつたが、「千代田」の地名は柏市となつた現在も柏市街に町名として残っている

次に、つくばエクスプレスの「柏たなか」駅などに地名の片鱗が残っている「田中」であるが、柏市域にあった田中村は明治22年(1889)の大合併で誕生した。これは、花野井村、大室村、若柴村、正連寺村、大青田村、船戸村、

小青田村の7ヶ村と青田新田飛地と下三ヶ尾村、西三ヶ尾村、上三ヶ尾村の一部が合併して成立したものである。土村が現在の柏市域の南部にあったのに対し、田中村はその北部に位置する。明治24年(1891)の田中村全体の戸数は560、人口は3,701人と多い。「田中」という地名は、全国に分布するが、この「田中」地名は、旧田中村の村域に江戸時代に所領があった大名本多氏が治めた駿河国田中藩に由来するという。田中藩主の飛領があったから、「田中村」になったというのである。現在は「田中地区」という地区名、TXの駅名くらいしか一般には認識されないが、当会が10年以上前に行った柏飛行場関連の座談会において、戦時中東部第83部隊に所属していた方は、戦時中は「柏飛行場」というより、「田中村飛行場」という呼び方のほうが一般的であったと証言された。

今も学校名などに残る「富勢」も明治22年(1889)の大合併で生まれた地名である。南相馬郡富勢村は明治22年

(1889)の大合併で根戸村、宿連寺村、布施村、久寺家村、印旛郡呼塚新田、同郡根戸村新田、同郡松ヶ崎村新田、同郡柏堀ノ内新田字一番割および水神前が合併して成立したが、それまで布施村と根戸村が村名を競い合っていた。その大合併で誕生した富勢村は、戸数460、人口2,792人となったが、その際布施村は戸数259、人口1,571人という合併後の半数以上を占める大規模な村であったが、根戸村も戸数110、人口692人と人口比25%を占める。そこで、どこかの村名を生かして、それ以外の村名を廃止するのは、合併後の不和などの禍根を残すことが想定された。苦肉の策の折衷案は、合併する小村、布施・久寺家(くじけ)・根戸・宿連寺(しゅくれんじ)の各一字をとつて「布久根宿(ふくねしゅく)」村であった。この折衷案も不評だった模様で、いろいろと揉めた拳句、仲裁に入った当時の郡長が出した「村が富み栄えてほしい」という意味の「富勢」案に決定したのである。

8. おわりに

地名は、その土地の地形や成り立ちをあらわすものが多いと冒頭書いたが、確かに地名の多くはその通りなのだが、明治以降の新地名については例外がある。開墾地名は、開墾された土地の順番をあらわしているといえるが、「土」は全くの合成地名であるし、「千代田」「富勢」は瑞祥地名といえる。しかし、長い目でみれば、全ての地名はある時点で土地に対する何らかの表現として誕生したものであり、言い換えれば全ての地名に歴史があるといえる。

「柏」という地名も、いわば江戸時代の新地名である。それは古代からある「千葉」という地名よりは新しいが、例えば明治期に出来た「習志野」(明治天皇が明治6年(1873年)4月に現在の船橋市習志野台一帯で行われた陸軍大演習の後、その演習をした原に「習志野ノ原」と命名したのが由来という)といった地名よりは古い。

なお、柏村の集落形成に關して、柏市街地にある寺

社の成立が考える鍵となると思われる所以、柏神社と長全寺について、前に簡単に触れてはいるが以下補足したい。

まず柏神社についてであるが、柏神社は、山形県の出羽三山の神々を羽黒山に合祭した出羽神社と、京都の八坂神社の合祀社である。昔の地図では、柏神社を「八坂神社」と表記している。

柏神社の出羽三山に祀られる神々がこの地の近くに迎い祀られたのは万治3年（1660年頃）であるが、一方、八坂神社は万治4年～寛文元年（1661年頃）当時流行した病より人々の命を守るために、この境内に祀られた。

その昔は柏神社は天王様と呼ばれこの地域の人々に信仰されていたのである（以上の概要は柏神社HPより）。

なお、境内には宝永4年（1707）二手青面金剛塔などの石仏群がある。

また長全寺（山号：戸張山）は、現在のアミュゼ柏（昔の柏中央公民館、柏町役場）に近く、柏市街地に唯一存在する寺院である。前出の『駅路鞭影記抜萃』

に「宿の右に長禅寺とて禅宗あり」とあるが、この寺のことである。

長全寺は天正3年（1575）4月25日、松戸市広徳寺5世、巧室梵藝大和尚を勧請し、曹洞宗寺院として開山。その後

15世紀以来この地域で勢力を張っていた戸張氏の菩提寺として栄え、寛永年間（1624年～1644年）頃に戸張村の香取神社近くから現在地へ移転したとい

う（長全寺HPより）。

長全寺は開山された戦国時代から江戸初期までは、柏市戸張にあった。その長全寺にある板碑は、康永四年（1345）と読める銘文があり、これは戸張から

長全寺の移転とともに、持ち込まれたものと思われる。長全寺が開山されたという天正3年（1575）には、戸張城に代々拠った戸張氏は戸張用賀城の岩立氏などに圧迫され、築田氏を頼って今の埼玉県吉川市に退転していたと思われる

ので、長全寺が戸張氏の菩提寺となったのは考えにくい。あるいは長全寺の前身の寺が戸張にあって、戸張氏が菩提寺としていたものか。

ともかく柏神社が1660年頃創建、長全寺が1640年頃に移転すれば、江戸前期正保年間の水戸街道の整備の後、寺社が柏に出来て、集落の原形が形成されたものであろうか。

以上、長々と述べてきたが、集落の中心であった寺社の歴史を調べることによっても、その地名を冠する土地の成り立ちが裏付けられるであろう。

地名だけみて、その発音から無理やりアイヌ語などに意味を求めたり、前提なしに他の地方の同じ地名から類推することは、余り正しくない結果をもたらすかもしれない。

地名自体の発音、表記に加えて、その由来を示す歴史的事実を領主や村方の文書、寺社の記録や領主、口碑も含めて、その地の様々な事績の中から地道に拾うことが重要であると思われる。



<柏神社の前で>

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報

2024年3月31日

第50号

(参考文献)

- ・『柏市史 近世編』 柏市 (1995)
- ・『柏市史 近代編』 柏市 (2000)
- ・『角川日本地名大辞典 12. 千葉県』 角川日本地名大辞典編纂委員会 (1984) 角川書店
- ・『千葉県の鉄道史』 千葉県企画部交通計画課 (1980) 他

お知らせ

<2024年度当会総会について>

日時： 2024年4月28日（日） 11時より12時頃まで

場所： パレット柏 ミーティングルームC

議題： 2023年度活動実績、会計報告、2024年度事業計画、予算案、体制案
会則変更（事務所住所を個人宅記載から「別に定める」とする）
(なお、当日ご参加できない方のために葉書による議決も並行して行います)

<4月28日当日開催 2024年度第1回歴楽講座>

日時： 2024年4月28日（日） 12時45分より15時頃まで

場所： パレット柏 ミーティングルームA・B

内容： 口ケット戦闘機秋水と柏飛行場・藤ヶ谷飛行場

参加費用： 300円（資料代他）



<7月14日 当会創立25周年記念 講演と音楽の集い（イベント名は仮称）>

日時： 2024年7月14日（日） 13時30分開演 16時30分頃まで

場所： アミュゼ柏 クリスタルホール

内容： 間宮正光氏による講演「考古学からみる城のつくり方」

フォークシンガー有吉かつこさんによる弾き語り（詳細は今後決めていきます）

<会誌『水辺の城』第8号発刊について>

当会創立25周年記念号として、本年7月発刊を目指し、鋭意作成中

既に原稿はいくつか集まっていますが、まだ余裕がありますので、寄稿いただける方はご連絡願います ⇒ メールは info@matsugasakijo.net まで

- ・テーマ：地域（東葛以外でも構いません）の歴史・自然、文化財等に関するもの（論文、紀行文、エッセイ他）、個人の近況、イラスト、写真など
- ・期限：2024/5月末、分量：A4で1枚～30枚程度

手賀沼が海だったころ

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報 第50号 2024.3.31

編集・発行人：森 伸之

年会費2千円 振込先：千葉銀行 柏支店 普通 口座番号3461475